



で き こ と

10月6日(木)、県立中央図書館において、「静岡県立中央図書館新刊児童図書巡回展示研修会」を開催しました。東部、西部と巡回してきた3年目の今年は、当館での開催ということで、これまでの倍に当たる約2,000冊の新刊児童図書を会場に展示しました。

「新刊紹介」、「学校図書館充実のための選書」のお話の後、「新刊児童書の選書について」と題して、静岡文化芸術大学の林 左和子准教授に講義をしていただきました。講義終了後の「新刊書の閲覧及び資料相談」の時間では、展示された新刊児童図書を前に、選書に関する相談に応じました。

参加者は、メモを取り、熱心に選書をしていました。(2ページ目にて、概要を紹介します。)

10月24日(月)グランシップにて「静岡県図書館大会」が開催されました。

午後には7つの分科会にわかれて、テーマに沿った事例発表や講義が行われました。子どもの本に関する分科会として、第6分科会が学校図書館「学校図書館から学びを広げる～様々な交流から生まれる学びの可能性～」をテーマに開かれました。

静岡市立末広中学校校長の永田 研氏より自身の読書体験や校長先生としての学校での取り組みを紹介していただきました。また、三郷市教育委員会(埼玉県)の福田 孝子氏を迎えて読書活動支援員としての取り組みについてお聞きしました。

(3ページ目にて、概要を紹介します。)

◇子ども図書研究室のテーマ展示◇

◆「まめ・マメ・豆の本2」

豆に関する本を展示しています。

◆「書評誌で取り上げられた子どもの本」

書評誌に取り上げられている子どもの本を展示します。どのように紹介されているか、実物を見ながら確かめてみてください。

◇イベント情報◇

◆浜松市立図書館子ども読書活動推進講演会 「絵本は生きる力」

講師：松居 直さん(児童文学者)

日時：2012年1月8日(日)午後2時～4時

会場：なゆた・浜北3階大会議室

(浜松市浜北区貴布祢 3000)

定員：200人(先着順)

申込：11月25日(金)午前9時から、電話

または直接浜松市立中央図書館へ

※駐車場に限りがございます。できるだけ公共交通機関をご利用ください。

問合せ：浜松市立中央図書館

(電話 053-456-0234)

◇県立中央図書館◇

◇大規模改修工事のお知らせ◇

当館では、本年度中に大規模改修工事を予定しています。

今回の工事は、閲覧室の空調工事や屋上防水工事などを行います。

休館中は子ども図書研究室も閉室します。

利用者の皆さまにはご迷惑をお掛けしますが、ご理解・ご協力をお願いいたします。

○11月21日(月)～3月9日(金)

：1時間駐車場利用不可

(ただし障害者用スペースは除く。)

○12月1日(木)～12月7日(水)

：閲覧室屋上のはつり工事

特に12月5日(月)と12月7日(水)は相当な騒音が発生します。

○2月1日(水)～3月15日(木)

：全館休館

詳しい情報は、当館 WEB サイト等で随時お知らせします。

新刊児童図書 巡回展示研修会報告

当日、会場には、2011年1月以降に出版された児童図書を約2,000冊展示しました。その中から、東日本大震災に関連して、地震、津波、原子力発電に関する図書や、この「子ども図書研究室だより」で紹介した図書などは、抜き出して、別に展示をしました。午前の自由閲覧の時間から来館し、本を手にとって選書をしている参加者も多数いらっしゃいました。



新刊紹介は、3月に創刊した集英社みらい文庫のシリーズ、年末に映画の公開が予定されている「タンタンの冒険」シリーズなどを取り上げてご紹介しました。



県総合教育センターの学校図書館担当である夏目指導主事からは、「学校図書館の充実のための選書の在り方」として、学校図書館の機能などに関する基礎的なお話がありました。学習指導要領が改訂され、言語活動を取り入れた授業が増え、学校教育における学校図書館の役割が大きくなっているなど、現在の学校図書館についてのお話も伺うことができました。



林左和子講師の「新刊児童書の選書について」の講義からは、印象に残ったお話を紹介します。

資料には、図書館に所蔵しておきたい資料と、他から借りてくることで足りる資料とがあります。調べるために必要な基本的な資料はもちろんですが、目立って人気はなくとも、手に取れば喜ばれる本（古典、地味な本など）は、図書館に所蔵しておきたい資料と言えます。なぜなら、備えておけば、いざという時、子どものためにすぐ紹介できるからです。

選書の3段階として、①準備、②選書、③アフターケアがあります。準備は、自館のコレクションに足りない部分を押さえる、児童書の知

識を積み重ねるなど。そして、実際の選書。アフターケアは、入れた本が子どもたちにどう利用されているかを知り、利用されるように働きかけることです。



選んだ本が今すぐ利用されないということが選書の失敗ということにはなりません。将来利用されるために買っておく、また、利用されるために仕掛けていくことが大切です。

選ばなかった本についてもアフターケアをしてください。昨今の出版事情から、本はすぐ買えなくなります。買っておかなければ、子どもは決して出会えません。選ばなかった本の評価はどうか、他の場所でどう使われているか、フォローしていく必要があります。



講義の後には、新刊を閲覧しながら、講師、当館職員で、資料に関する相談を受け付けました。研修会終了後のアンケートからは、参考になった、ぜひまた参加したいとの声が多く寄せられました。

所蔵資料から

研究

『図書館雑誌』



2007年6月号

(第101巻第6号)

日本図書館協会

(書庫にあります。)

特集は「選書の現場から」。講義中に林講師が紹介された、明定 義人氏の「生活圏の図書館における積極的な選書」が掲載されている。

(鈴木)

静岡県図書館大会 第6分科会 学校図書館 報告

活字中毒なだけで読書家でもないし、読書教育にも熱心なわけでもないと言われた永田氏。そう言いながらも、本を読むことの大切さを生徒たちに伝えたいという気持ちが熱く伝わるお話でした。

本は視野を広げる そう感じられて、校長室前の掲示板には下のような文言が貼られているそうです。

「本は未知の世界への扉を開けてくれる。時を越え、空間を越え、新たな人や出来事との出会いが待っている！」

子どもの頃は、自宅に子ども向けの文学全集やノンフィクション全集が揃えてあったと言います。当時は、その本をひたすら夢中になって読んだということでした。振り返って、幼少期の読書体験は大事と、家でも教育施設でもいいから読書環境が整えられていると良いとおっしゃっていました。

その後は、ラジオテキストや新シリーズ刊行の誘い文句につられて様々な読書経験をされてきたそうです。読書をすることで疑似体験ができる、直接の体験ではないがこれも素晴らしい経験と読書の意味を伝えられました。

中学校の先生として、授業と直結した図書館経営が効果的としています。校長先生としては、集会や掲示板で本との出会いの場を、本とつながったメッセージを生徒たちに送っているとのことでした。ご自身が理科のご専門とのことで、ロケットや自然現象（台風）などを科学の種として本とつなげているとのこと。教育は息の長いもの、短期的な結果を求めて欲しくない。折々に生徒に語りかけていきたいと締めくくられました。

後半は、埼玉県三郷市で読書活動支援員として活躍されてきた福田孝子氏に学校図書館での取り組みについてご紹介いただきました。

子ども読書年、国民読書年、教育指導要領の改訂など、ここ数年で読書や学校図書館を取り巻く環境が変わってきたとしています。その波から平成18年ころから三郷市の取り組みも盛んになってきたそうです。

三郷市教育委員会の生涯学習課を所管として、読書活動支援員が生まれました。その1人目が福田氏です。学校図書館支援員は、学校図書館を市民向けに開き、公共図書館との連携を作り、講座・講演会の運営もする業務を担っていました。

- ・中庭も廊下も図書館の一部として取り込み、スペースを拡大
- ・デザイナーの力を借りて、児童・生徒による図書館のディスプレイ
- ・市立図書館との連携で、学級文庫、朝読セット、テーマ本等を提供
- ・夏休みに市立図書館から本を借りて地域の方々に貸出し
- ・商業施設内で児童・生徒手作りのパネル展
- ・読書記録ノート、言葉のノートの活用
- ・ブックバッグの活用

どのようにしたら、“読書環境”を日常としていけるかをよく考えられた取り組みで、大変興味深いものばかりでした。

また、これまでの活動のパネルや冊子を展示していただき、私たちは理解をより深めることができました。

学校図書館単独の取り組みではなく、市全体としての取り組みであることを考えるとその推進には大変ご苦労が多かったであろうと思います。私たちも三郷市の取り組みを参考にして、頑張っていかなければと励まされました。

(青山)

新着資料から

知識

『作ってふしぎ！？』



トリックアート工作』

北岡 明佳／監修

グループ・コロンブス

／構成・文

あかね書房

2011年7月

“目の錯覚”についての知識をメビウスの輪やトリックアートの工作体験をして、理解することができる本である。

実際に作って見ることで、一層の理解が深まる。そんな知識をおいても、自分がトリックアートやからくりおもちゃを作れるという楽しさを感じられる。

型紙があるので、難しいことはない。友だち同士で見せ合って“目の錯覚”を確認したり、新しいトリックアートが生まれたりすることを期待したい。【小学生低学年から】 (青山)

文学

『パンプキン！ 模擬原爆の夏』



令丈 ヒロ子／作

宮尾 和孝／絵

講談社

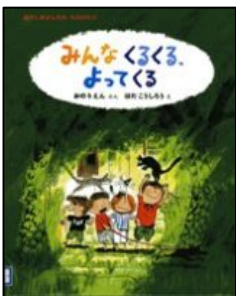
2011年7月

パンプキン爆弾とは模擬原子爆弾の別名。小学5年生のヒロカは、同じ年のいところがパンプキン爆弾について調べていることを知り、自分も夏休みの自由研究のテーマとして調べ始める。始めは、戦争のことなど聞きたくないという気持ちだったが、次第に、もっと知りたい、みんなに伝えたい、と変化していく。

パンプキン爆弾被弾地の地図があり、日本全国、そして静岡県内にも投下されたことが分かる。巻末には、ヒロカが完成させた壁新聞も載せられている。【小学校中学年から】 (鈴木)

絵本

『みんなくるくる、よってくる』



おの りえん／ぶん

はた こうしろう／え

フレーベル館

2011年7月

毎度にぎやかな、おかしきさんちに、子猫が3匹やって来る。くろ、ぶち、きじの捨て猫3匹に困ってしまうかあさんは聞いた「でも、なんでうち?」。そして、ふー、まー、いー、うーの4人兄弟を見回して考える。「やっぱりふーがいるからかな。」木みたいに安心な、とびきりのんびり屋さんのふーは、虫にも鳥にも猫にも好かれる。ふーを心配しつつ、そこに一番の良さを認めるかあさんと兄弟たちの描写が、ほほえましい。のんびり、ゆったりと味わってほしい絵本である。【小学校低学年から】 (小松)

絵本

『ひとりぼっちのジョージ』



ペンギンパンダ／作・絵

ひさかたチャイルド

2011年7月

ガラパゴス諸島のピンタ島で、たった一頭生きていたガラパゴスゾウガメのジョージ。「ロンサム・ジョージ」というニックネームからは寂しく辛い状況が想像されるが、本当は「ひとりぼっち」ではない。「ジョージの夢はいつかピンタ島の自然の中で、他の生き物たちと共に生きていくことだ。今ならまだ地球は救える。子どもたちには生きる喜びと共生を求める、頼もしい地球人になってほしい」という作者のメッセージが伝わってくる。デザイン性の高い絵も魅力的だ。【小学校中学年から】 (杉田)